

逃げる

伊藤 錦司

オリヒラク、ハジマリ、オイカケル、タノシイ、クエル、エモノ、ヒト

「ガシャ」と音がしたらスタートとしか伝えられていない男、周りを見ても、左を見ても、木、木、木、木、そして草、そうここは森しかもかなり深い。「音なったけど、スタートって言われても、わからん」男は知らない、これから始まる逃走劇を：

いきなり男の目の前に何かが現れた。

「な、なんだ」現れたそれは、振り向き男を見つけた途端、ニヤリとするように口を開け、攻撃をしてきた、手が伸びてくる。

「うわあゝ！！」急いで逃げ出した。

「なんなんだよ」それでもなお攻撃をしてくる、人間ではないようだ、でも男は逃げ切れる自信があった。

「俺は足が速いんだよ」昔、地区代表に選ばれたという確固たる証拠がある。謎の生物は何か満足そうにジャンプして消えた、もっと遊んでからでもいいかという風に、そんなことは知らずに男は走っていった。

「はあ、何とか：まいたか」

どうしてこんな事になったのか、一週間前にさかのぼる…。

何もすることがなく、金もない男は、家にいるのもつまらなくなり、ぶらりと散歩に出かけた。

「たまにはいいな外も」その日はとても暑かった日陰にでも入って一休みでもしよう、近くに林があったのでそこで休むことにした。

「ああ生き返る」上着をばたつかせ体を仰いだ「ふう〜」

その時、背中に殺気を感じた、振り返ると、こんな熱いのにスーツを着込んだ、いかにも、という雰囲気の方が立っていた。

「ここで何をしている？」

「なにをしてみたて、な、なにも、してませんけど」

焦りつつも答える、スーツの男は怪しいなという表情だ。

「まあいい、だが少し手伝わってもらおうか、人手不足でな」

「何をするんでし」遮るように

「何も聞くな、何らかの方法でおまえを迎えに行く、来週の日曜日までにはな」

「はっはい」

「いいかこのことは誰にもしゃべるな、言えばわかるだろ：結果は」

「・・・」

「まあ何にしろ、おまえは終わりだろうからな」

スーツの男は独り言のように、最後の一言を吐き捨て林の中に消えた。

その日は突然訪れた。

男が数人やってきた、ベットで気持ちよく寝ているのに関わらず、いきなり麻袋を被され

「何をすんですか！」寝ぼけつつも抵抗しようとした、しかし「ドス」気を失った。

バンバン

「う、うんわかつてるよ、今起きるようるさいな、なんだよ」

目を開けるとスーツの男がいた。

「うるさい？」

「そ、そんなことありません」シャツキつと正座をした。

「よし、いい子だ今からゲームを始める、ルールは簡単：逃げるだけだ」

「え！？」

「そのうち檻が開くような、音がするそれがスタートの合図だ」

「いつまで？」

「知らんなあ、上からはそう言われただけだ」

「そんなあゝ」

「ま、頑張れ」ニヤリとしてから「じゃあな」男は森の中に消えた、そこからスタートした。

「なんなんだ一体」さっき現れたアイツの事を考えてみることにした、猿っぽい、牙が長い、あとはく攻撃的：わかるのはそれだけだな、そんな時「ガサッ！」振り向いたと同時に腕が伸びてきた。

アイツだ、手には長い爪がギラついていた、なにかをヤツてきたらしい、血が付いている。とつさに男は近くにあった木で腕を殴ったが、ビクともしない、逆に木が欠け、腕がしびれた、ヤバイ：また自慢の脚力で逃げた。

アイツは追いかけてきた、さすがに相手は何かはわからないが、スタミナは俺より遙か上に違いない、足の速さはどうだ、後ろを振り向くと：いない、だが気配は感じる、どこだ、どこに、まさか、そのまさかは的中してしまった、上にいる、腕力が強いようだ、木の枝を掴み、物凄い速さで追ってくる、楽しげに、嘲笑うかのように、追いかけてくる、男のスタミナもそろそろ限界だ。チクショウ勝てるわけがない、チクショウ、チククショー：！？「うわあああああゝ：」ゴン！気を失ってしまった。

何分いや何十分、何時間たったかわからない、頭の激痛とともに意識が戻ってきた、裂け目に落ちたらしい夕焼け空が見える、こんな無防備な状態なのに襲われていない。アイツは：目が悪いのか？だとしたら、夜になればひとまず休める、疲れたし腹も減ったな：って食い物どうしよう、ああ、頭を抱えしやがみ込む、体力を考えるともう無理、朝までじっとしていよう、それしかない、その時、この世の物とは思えない、奇声が聞こえた、アイツに違いない：日が出れば鬼ごっこをまた始めることになる、腹ごしらえはこの時間にしなけ

ればいけない、つくづく面倒な奴と付き合うはめになった、動くより他ないな、ああ嫌だ：でもタダでエサになるよりいい、ひとまず川を探そう、川があれば魚もいるし水も確保できるはずだ、よし夜の散歩に行くか、果たして川はあるのか。

人狼が出てきそうな月夜、そのおかげで探索が出来るのだが、たまに耳を澄まして、水が流れているような音は聞こえない、むしろ不気味な静けさを感じ取れるだけで、疲労、空腹、脱力感、虚しさが増える一方だ、

何の意味も：やめた、やめた、こんな事考えたらなおさら疲れるだけだ、あゝ、あくびが出た、一休みでもしよう、木により掛かる、すると猛烈な勢いでアイツが来た、

「グルルウ」血でベトベトになった牙で噛みついてきた。

「うわあああゝ」その瞬間、目が覚めた。

「ハアハア、夢か」木により掛かった途端、寝てしまったらしい、危ない、パンパンしつかりしろ！！と顔を叩く、よし、のっそのっそと歩き出した。

しばらく歩いていたらあることに気づいた。

「下っている：のかなあ」ということは川が近いのかもしれない、目的地につけそうだ、どんどん歩いていくと、チョロチョロとかすかだが水の流れる音がする、期待がふくらむ、やる気が湧いてきた、音が大きくなってきた、近いぞ「冷てえー！！」なにになが、もしやアイツが：上を見上げた、いない、いないぞって、冷たいのは足だよ、下を見る、すると小さい沢が流れていた本流はこの先だな、沢づたいに歩いていくことにした、川は確実にある。

魚はいるか分からない、いたとしても捕まえられるのか、魚が捕れたら：

「アツ」重大なことに気がついた。どうしよう、こんな森にコンロや包丁があるわけがない、料理が：できない、火があればどうにかなるんだが、

昔キャンプに行つて火を点けたことがあるが、かなり前のことで記憶が定かではない、うまい具合にできればいいが、そうこうしている間に川についた。

火を点ける方法はたしか、枝を使って、枝の先を板に押し当て、溝を作るように同じ場所をこすりつける、これを繰り返せば火種ができるはずだ、その火種を燃えやすい物に移して、火を大きくし串に刺した魚を焼く、これがうまい具合に出来た、ただ魚を捕るのに苦労したが食料と水分の確保に成功した、あとはアイツをどうするかだ。

アイツは今頃何をしているのか見当が付かないが、たぶん好戦的な性格だからむやみやたらにいろんな生き物を襲っているに違いない、アイツを誘いだし捕まえるなり、倒したりすればこんなサバイバルも終わるはずだ、でも倒すにせよどうしたらいいのか、罠を作るとしたら、落とす穴：しか作れないや、じゃあ早速穴を掘ろう、また沢づたいに森に戻った。

ザクツザクツザクツ、地面に木の棒を突き立てほじくる、少しずつではあるが掘れている、ひたすら掘る、やすんではまた掘る、掘る掘る掘り続ける。そうしているうちに肩まで入れる深さになった、あとは枝を折り尖らせる、アイツが落ちたら刺さるといふ寸法だ、うまく行く確率は少ない、だがこれに賭け

るしかない、どうアイツをおびきだすか：自ら囿になるしかない、アイツはどこにいった。

アイツを探して森を彷徨う、五感を研ぎ澄まし、精神を集中させる。あとは執念で粘り、自慢の脚力で罨へと、そしてこの逃走劇を終わりに向かわせる、うまく行くはずだ、いやうまく行ってくれ。

自分の命を張った大博打だ、失敗すればあの世へおさらばだ、絶対生きてこの森を抜けてやる、絶対に、そのときゾクつとする気配を感じた、アイツだ

「ニヤリ」二匹の野郎、ともに「チャンス」が到来したようだ。今だ、アイツは追いかけてきた、ひたすら男は罨へと走った。仕留めるために、終わらせるために、もう一歩だ、最後の力を振り絞り、

「うりゃああああ」罨の向こう側めざし男はジャンプした、だがアイツを何かを察知したかのように同じく飛んできた、もう少しというところで、かわされた。

「チクショウ」アイツはニヤリと笑った、獲物は捕まえたというように、嘲笑うかの如く唸る。そうなつてたまるか、男は必死の抵抗をする。

タダではエサにはならん、アイツの後ろには、俺のお手製の罨がある、もう少しだ、一撃でも食らわせれば、アイツを落とせる。男は突進した、自分がどうなるかなど顧みずに：

男はベットで寝ていた、これで全て終わりという事を感じ取れなくても、終わったんだ：やっと、何か結末に納得がいかない、やけに歯切れの悪い感じがした、アイツは何だったんだ

アイツもろとも罨に落ちた、自分は魚のように串に刺さることはなく、大丈夫だった、そこへ、いかにもなスーツの男が現れた、

「ご苦労さん、協力ありがとう、じゃあな」

「じゃあなつて、こいつはなんなで」

「喋るな、迎えをよこす」

「な、何か納得がいかないんです、アイツは何のために」

きっぱり、スーツの男は言う

「さあな、しらんよ、上のお考えは、おっ丁度いいところに来た、連れてけ」昨日同様、麻袋を被され、連れて行かれた、もちろん気を失い、気がつくとベットの上がった。

最後まで歯切れの悪い結末だ、納得がいけない、そうこう考えているうちに、男は眠っていた。

はたしてアイツは何なんだったのか：わからないまま